

## 書評 木畑洋一著 『イギリス帝国と帝国主義 比較と関係の視座 』

著者	井野瀬 久美恵
権利	Copyrights 日本貿易振興機構（ジェトロ）アジア経済研究所 / Institute of Developing Economies, Japan External Trade Organization (IDE-JETRO) <a href="http://www.ide.go.jp">http://www.ide.go.jp</a>
雑誌名	アジア経済
巻	50
号	3
ページ	74-77
発行年	2009-03
出版者	日本貿易振興機構アジア経済研究所
URL	<a href="http://hdl.handle.net/2344/00007190">http://hdl.handle.net/2344/00007190</a>

木畑洋一著

# 『イギリス帝国と帝国主義 ——比較と関係の視座——』

有志舎 2008年 249ページ

いのせくみえ  
井野瀬久美恵

## I

本書は、20世紀イギリス帝国史を専門とする著者が、過去15年ほどの間に執筆した論文のなかから主要なものを選んで、イギリス帝国と「帝国主義の時代」の再考のために編み直したものである。

それまでに書きためたものを「再編」する作業には、再編時の、すなわち著者にとっての「今」の、問題意識が鮮明に映し出されるものである。再編集作業のなかでは、「あのとき自分は何を書いたのか／なぜこれを書いたのか」という過去の問題意識も、その間の国際情勢の変化や研究動向のなかで練り直され、再配置される。本書も例外ではない。全3部8章に構成し直された以下の全体像をながめていると、著者が「今」何を問題にしたいかが透けて見えてくる気がする。

### I 帝国主義への視座

第1章 世界史のなかの帝国・帝国主義

第2章 帝国意識論

### II 帝国主義の諸相——イギリスと日本——

第3章 帝国主義時代の帝国祭典——ヴィクトリア女王の即位記念式典——

第4章 帝国主義世界体制と日本

第5章 イギリスと日本の植民地統治

### III 脱植民地化と帝国の残映

第6章 「帝国の総力戦」としての二つの世界大戦

第7章 帝国から連邦へ——コモンウェルスにかけた夢——

第8章 未完の脱植民地化

以下、再構成された本書の流れと内容を若干の所見を交えながら紹介しつつ、まずは著者の問題意識とその展開の様子を明らかにしていきたい。

## II

第1部の2つの章は、本書のスタンスと課題を示すという意味で、「はじめに」を補完しながら、いわば全体の総論としての役割を果たしている。著者の「今」の問題意識が明確に示されるのもここにおいてである。

第1章では、本書全体の基調となる、帝国主義をめぐる基本的な枠組みが提示される。

著者の主張は明解である。19世紀後半、すなわち開国後の日本が「明治という新しい国家」づくりに着手していた時代、世界では、ヨーロッパ諸国を中心に、「帝国主義」をキー概念とする国際体制が構築された。「ヨーロッパ国際体制が他を圧して世界の形を規定する」、歴史的にもきわめてユニークなこの「帝国主義世界体制」は、「第二次世界大戦後の脱植民地化の過程を経ることによって大きく変化」し、「その流れの先に現在の世界は存在している」(28～29ページ)と著者は見る。言い換えれば、過ぎ去った(あるいは過ぎ去ろうとしない)20世紀という時代を、この「帝国主義世界体制」の変容と解体の過程として捉えようというのが著者の狙いであり、強調点だといえよう。著者がこの世界体制の概念規定に強くこだわるのはそのためであり、さらには、昨今喧しい「帝国論」を意識してのことである。

ベルリンの壁崩壊やソ連という国家の消滅以後の、いわゆる「ポスト冷戦」の国際情勢が、もっぱら「帝国」をキーワードに語られてきたことはよく知られている。とりわけ9・11以降、世界唯一の覇権国となったアメリカを「帝国」とみなす視線は、アフガニスタンやイラクでの戦争とその戦後処理のなかで強まり、数々の「アメリカ帝国論」が欧米、そして日本の書店を彩ってきた。氾濫する「帝国」、「帝国主義」という言葉——。歴史的コンテクストを欠い

たその使われ方に、著者は警戒感を強める。さらには、アメリカの単独行動主義を「帝国」の再来と捉える見方や、それを「デモクラシーの帝国」や「自由の帝国」とみる見方にも、疑義を唱える。現代国際政治に大きな役割を果たしているアメリカだが、それは「帝国」とよべるのか。現代世界を「帝国主義」という概念で説明してしまっているのだろうか。

くわえて著者は、現代の知識界に「帝国」という言葉を広く流布させたアントニオ・ネグリとマイケル・ハートの『＜帝国＞』[ネグリ／ハート 2003]がいう「中心なき帝国」という言葉にも強い違和感を表明してこういう。「帝国には中心と周縁が必要である」——そのうえで、帝国を構成する「中心」と「周縁」の双方に（それらが固定化しないように）目配りするなど、過去の帝国のあり方を総体的に理解する必要性とともに、個々の帝国史に関する「総体的な研究」を比較し、関係づける重要性を提言するのである。

著者のいう「総体的な研究」には、政治や経済のみならず、人びとの意識の問題も含まれる。第2章で展開される「帝国意識」がそうだ。帝国主義世界体制が構築された19世紀後半、各帝国の中心にあった（あるいは中心として形成されつつあった）のは「国民国家」であった。それゆえに、この世界体制は「国民意識」とも無関係ではいられなかった。もっといえば、国民統合と帝国の拡大・再編は（ある意味で）補完関係にあったことになる。階級や宗教、民族や職業、ジェンダーなどの違いを覆い隠し、「国民意識」の形成を可能にし、さらに強化するような働きかけが帝国を通じてなされていた、と言い換えてもいいだろう。それを著者は「帝国意識」——支配する側が支配する立場を当然だと思ふような意識、あるいは当然視する無意識の心性（38ページ）と捉え、この意識が広く民衆にも共有されることで、帝国主義をキー概念とする世界体制は支えられ、存えることができたことを強調するのである。

かつて著者は『支配の代償』[木畑 1987]のなかで、「羊と岩だらけの島」フォークランドをめぐるアルゼンチンとの紛争に、イギリスの労働者たちの帝国意識を鋭く嗅ぎとった。帝国意識を押し上げる

「何気ない涵養装置」が、労働者はじめ、従来帝国の存在とは無関係だと思われてきた人びとの周辺にも、多様に、そして確実に存在していたのである。第3章で分析される2つのヴィクトリア女王即位式典は、その典型例といえるだろう（その意味で、第3章を第2部に配置したことに評者は多少違和感を覚える）。

本書副題に謳われた「比較と関係の視座」が具体的に問われるのは第2部、帝国主義世界体制のなかに日本を位置づけようとする第4、5章である。著者は、1890年代半ば以降、ヨーロッパ諸国の関心がアフリカからアジアに移行し、東アジアこそが帝国主義世界体制の焦点となったとし、その大きな要因として日本を、日本が仕掛けた日清・日露という2つの戦争を議論する。この世界体制が共有する「文明」のルールが実践されたこと、たとえば、松山収容所等におけるロシア人捕虜に対する手厚い処遇は、その傍証だろう。見方を変えれば、それは、欧米列強同様、「文明の落差」という言説を通じた植民地支配の正当化に他ならない。そうした「支配のモデル」を提供したのもまた、イギリスであった。

第3部では帝国主義世界体制の崩壊、いや変質とかかわって、2つの世界大戦とその末が議論される。第6章で繰り返される「帝国主義戦争としての第一次世界大戦」という言葉が、先述した著者の一貫した問題意識を何よりも如実に物語る。第一次世界大戦からはじまる帝国解体のプロセス、そのなかで動揺する帝国主義世界体制。その再編作業こそがヴェルサイユ体制であり、続くワシントン体制に他ならない。いや、「持たざる国」との自己規定のうえで侵略戦争に乗り出した日本、ドイツ、イタリアの動きを一定程度認める1930年代の宥和政策（そのなかには、日本の中国東北部侵略への対応も含まれる）も、この世界体制の延命策だったと著者はいう。それが、第二次世界大戦に、反ファシズム戦争と帝国主義戦争という複合的な性格を与えたのだと——。

帝国主義世界体制を（基本的なところで）温存、延命させようとする試みは、イギリスの場合、モンウェルス構想や東南アジア等における「地域連携構想」などに受け継がれるとともに、帝国主義世界

体制解体の推進力、旧植民地における脱植民地化の動きとせめぎあうことになった。第7章において、著者は、「帝国の残像」のごとく、「中心」を志向するイギリスのメンタリティ、「大国幻想」への警鐘を鳴らしている。

こうした議論の流れを考えると、著者が、通常植民地支配を受けた側の問題として理解されている「脱植民地化」を宗主国側の問題としてとりあげる新稿を最終章として加えたのもうなずけよう（もっとも、フランツ・ファノンやグギ・ワ・ジオンゴ[ケニアの作家]らがいう精神面を含め、旧植民地の人びとが模索する「脱植民地化」とその課題と、宗主国だった英仏の人びとが脱却すべき問題との間には質的に大きな相違があり、それを考えると、「宗主国の脱植民地化」という著者の言葉の選び方が適切かどうか、評者には疑問が残る）。

著者が帝国主義世界体制の「中心」に位置してきた宗主国に関して「未完」を主張するのは、第2章で議論した帝国意識からの脱却についてである。それは、支配された側の脱植民地化とのせめぎあいを通じて鍛えあげられていくものだが、そこに2つの「例外」があると著者はいう。アメリカと日本である。

アメリカについて著者はこういう。冷戦の文脈で脱植民地化の過程を押しとどめてしまい、帝国意識への自己批判を育む契機を欠いたまま、現代に至っている、と。日本についてはこうだ。敗戦と植民地喪失を同時に経験することで、脱植民地化の過程で向き合うはずの（評者の言葉でいえば）「脱帝国意識」の苦悩が、敗戦の苦渋に転換してしまった憾みがある、と。

これらは「比較と関係の視座」ならでは興味深い指摘なのだが、紙面の関係もあってか、「未完の脱植民地化」の中身の問題が深く掘り下げられたといえないのが残念である。

### III

ブームともいえる「アメリカ帝国論」の時流に乗らず、われわれの眼前で展開されている現在の国際

関係をより深く理解するために、19世紀後半から現代に至る時代を「帝国主義世界体制」という大きな枠組みの成立と発展、解体の物語として捉えようとする本書の試みは、基本的に成功しているように思われる。その一方で、国際政治のみならず、帝国を支える人びとの精神面にまで踏み込んで「帝国」、「帝国主義」の問題を考えようとする高い志ゆえにであろうが、著者が描く「帝国主義世界体制の物語」にどこか物足りなさを覚えるのは評者だけではないだろう。ネグリとハートの『＜帝国＞』の理解と分析をはじめ、現代の諸帝国論に対する著者の分析と批判にも幾ばくかの疑念が残る。ここでは、今後の帝国史研究を展望するという意味を込めて、以下の3点を指摘しておきたい。

第1に、「世界史上ユニーク」という帝国主義世界体制を議論する場合、「その成立と発展、解体の物語」の主語は何なのか、その主体をどう考えればいいのかという問題である。国際関係を左右する条約締結を担当する政治家たちが「主語」なのか。あるいは、ヴィクトリア女王即位記念式典に加わった「一般の人びと」をも含めて考えるべきなのか。そこには、国際政治の動きと帝国意識の問題がどのように絡みあっていたのかという問題とともに、両者をとり結ぶ（新聞のような）メディアの問題もあるだろう。あるいは、国際世論とは何か、それはどこで作られるのかという問題もある。こうした「何が主語／主体か」の問題は、どこに立って何を語るのかという各自のポジショニングが何よりも問われるようになった「今」という時代における歴史学研究の難しさといえるかもしれない。

それと関連して、帝国主義世界体制を解体に導いたのは何だったのか、という問題もある。この点に関して、著者はどんな「主語／主体」を念頭に置いているのだろうか。それが、帝国主義支配からの解放をめざす各地のナショナリズムの台頭、植民地の人びとの脱植民地化の動きというだけでは、議論としてはかなり荒っぽいといわざるをえない。たとえば、独立前後、あるいは独立をめざす運動の過程で、植民地が抱える課題が変質していったことは、アジア、アフリカ諸国が証明している。「帝国主義の全

盛期」といわれる19世紀末から20世紀初頭にかけて、すでに はじまっていたイギリス内部の「帝国主義」批判とそのゆくえとも絡めて、この世界体制の解体に関する「主語／主体」とその複合性を議論する必要があるだろう。

第2に、欧米列強の関心がアジア、とりわけ東アジアに移行した1890年代後半以降の時期に日本が果たした役割、そこに帝国主義世界体制の最終的な完成をみる著者の視点についてである。この視点に立ってこの世界体制の「解体と変容の物語」をながめれば、アジアに対する日本の責任はどのようにみえる／読み直せるのだろうか。そもそも日本がこの世界体制のルールに従って構築した（あるいは構築しようとした）「アジア」とは何だったのか。本書副題に掲げられた視座が試されるイギリスと日本の比較において、さらにはイギリスとは（そしてアメリカとも）別の意味で「未完」に終わっている日本の「脱帝国意識」についても、日本の責任を問いつける必要性だけでなく、その責任の中身についても示唆してほしかった。

そして最後に、未完となっている宗主国側の「精神の脱植民地化」とはどのような状態を示すのか、何をすれば（あるいはどのようにすれば）「帝国意識からの脱却」といえるのか、という問題である。著者が課題提起に終わっているこの問題は、帝国史研究内部の対話の問題——たとえば、「帝国の文化史」といかに「対話」するかの問題を含んでいる。

一例だが、著者は、ブラック・アフリカの植民地における教育問題にイギリスが関心を強めたのは第一次世界大戦後のことだという（126ページ）。しかしながら、それは、政府が施行する公的な教育制度を問題にしたときの話であり、そのずっと前、イギリスが奴隷制度廃止を「自分たちのアジェンダ」として組み込んだ18世紀末以来、英語の読み書きや現

地人エリートの創出を含めて、イギリスの価値観に貫かれた公教育制度を支える基本的な枠組みはすでに構築され、動き出していた。ミッションスクールとそこで育ったミッションエリートはその典型例であり、彼らの存在が植民地支配をめぐる問題や対立軸を複雑にしてもいた。しかもそれらは、公的な植民地放棄（＝植民地の政治的独立）とともに放棄されたわけではない。それどころか、「国民国家」としての植民地の独立過程で、そうした「帝国主義の道具」がさらに深く埋め込まれ、独立後の問題を変質させたという側面も否認ない。著者が「帝国主義」という概念でも帝国という概念でも説明できない新しい様相を提示している」（29ページ）という現代世界で「帝国」が語られている意味は、こうした点にもあるのではないだろうか。

それに何より、著者が論じる「帝国意識」の根っこにあるのは、「想像力の枯渇」——現地を知らない圧倒的多数の人びとに、現地を「想像」させ、それを「リアル」だと思わせてしまう文化の問題である。だからこそ、著者が議論した帝国論や帝国主義論、国際関係の枠組みとその変遷を、文化史的な帝国分析と対話させる必要があるだろう。その対話のなかで、著者が拓いた「比較と関係の視座」をいかに発展させ、帝国史の新たな地平を拓くか——それは「われわれ」の問題である。

## 文献リスト

- 木畑洋一 1987.『支配の代償——英帝国の崩壊と「帝国意識」——』東京大学出版会。  
 ネグリ、アントニオ／マイケル・ハート 2003.『〈帝国〉グローバル化の世界秩序とマルチチュードの可能性』（水嶋一憲ほか訳）以文社。

（甲南大学文学部教授）